

---

# 窓際魔導士の溜息

桐条

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

窓際魔導士の溜息

### 【Zマーク】

Z9996Q

### 【作者名】

桐条

### 【あらすじ】

富廷魔導士・ナズナは溜息が尽きない。強大な力を隠し、御伽話レベルの魔術をコツソリと探しながら、同僚から隠れて仕事をする日々。さらなる面倒事を避けるため、面倒いながらもコソコソ生活していた。さらに面倒の原因の一端で、存在 자체が面倒くさい、顔だけは無駄に良い面倒の権化につきまとわれる日々。そんな暮らしに溜息を吐きながらも、異世界で前を向いて生きる少女の日常譚。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。右も左もわからず、とりあえずと見切り発車。  
拙いかもせんが、よろしくお願いします。

## プロローグ

不意に感じた肌寒さに、思わず身じろぎをする。

太陽が雲に隠されたのかな。私は薄手のワンピース一枚。夏といつても、日がなかつたら肌寒くもなるだらう。

そう思い体を起こさうとするが、叶わない。体が異常に重いことに気付く。  
ならばと瞼を開こうとするが、同様に酷く重い。声も、発せられないと。

途端自身の状況を知ることが出来ないことに恐怖を覚える。

私は、私はどうしたんだっけ。ああ、そうだ。土手を呑気に歩いてて、滑つて河原へ転がり落ちたんだ。いい歳して、恥ずかしい。

思い出し、少し落ち着く。さわさわと、風に吹かれて草が音を鳴らす。

肌寒いが夏とは思えない日差しの柔らかさと、暖かい風が心地よくて微睡みそうだ。

駄目だ、死ぬかも。

土手を歩いてたのは真昼だ。心地良さはたぶん夕方だからだらう。かなりの時間が経っている。

そこに動かない体とこの眠気。最期に向かってるとしか思えない。なんて情けない死に方だ。私らしいけど。

今まで感じたことのない穏やかさで、やるやると死を受け入れて  
いく自分を感じる。

遠くなづかく意識の片隅で、草を踏みしめる音が聞こえた気がし  
た。

## プロローグ（後書き）

投稿できてるのか不安。

「はあ……」

人気のない静かな図書館の一角で、少女は大量の本に囲まれながらもう何度も目かになるかわからない溜息を溢した。

十代中頃の、よくいる砂色の髪に焦茶の瞳の少女だ。異国の顔立ちとさらりと流れる肩甲骨ほどの髪が一瞬眼を引くが、それだけだ。少女の発する平凡オーラのせいか、あえて覚えようとしなければ次の瞬間には忘れてしまうだらう。

しかし少女から垂れ流される溜息は、およそ年齢に似合わない疲労感漂うものであった。

「さつきからどうした。何度も溜息を吐いてるぞ?」

少女の程近くに本棚を背に座り込んでいた青年が訊く。

青年は二十代後半に見え、誰が見ても文句の付けようがない程整った容姿をしていた。艶めく漆黒の髪に、光の加減によつては金が瞬く澄み切つた闇夜の空の様な瞳が、青年の甘さと凜々しさを携えた顔立ちを更に際立たせていた。

「……あなたの」

地を這つたような低い声でぼぞりと少女は言つ

少女の声が聞こえなかつたのか青年はおもむろに立ち上がり、少

女を後ろから抱き込むと腕を伸ばしながら甘い声で囁いた。

「ん、どうした？」

「あんたのせいでしょうが！……」

叫びながら振り向きつつ青年に右ストレートをお見舞いする。結構な勢いで青年は吹き飛んだ。拳によりかなり重い音が響いたはずだが、少女の声はそれを軽く凌駕していた。

吹っ飛んでいく青年が本棚へとぶつかりそうになり、少女は慌てて本棚にシールドを張る。本棚が倒れたらかなわない。下手をすればドミノ崩しだ。

「ぐはっ…」

青年はシールドにぶつかり崩れ落ちた。そのままピクリとも動かないが、叫び続ける少女は気付かない。

「あんたが勝手に契約するから…！ただでさえ界渡りなんて御伽話レベルの事調べてるのに、さ・ら・に契約解除の方法まで探さなきやなんだよ…？私は何時になつたら帰れんのさ…溜息だつて吐きたくもなるでしょーが…！」

怒りに震える声で一気に捲し立てた後、乱れる息とともに感情を整える。

そこでやつと動かない青年に気が付いた。少女はやりすぎたかと焦りながら青年の元へと駆ける。様子を診るために膝をつこうとした

とにかく、ピタリと動きが止まつた。

青年はぶん殴られたにも拘らず、嬉しそうにしゃしゃとしていた。

「じんの変態……」

鳥肌が立ち、思わず倒れていた青年を蹴り上げていた。抵抗しない者に止めを刺すようで罪悪感を覚えないでもないが、この青年は殴られるのが嬉しいようなので、まあ良しとする。

そうやって少女は心の中で折り合いを付けつつ、青年を放つて先ほどまで本を読んでいた場所へと戻つていく。

そこは図書館の中でも滅多に人が訪れない地下フロアであり、さらにここ何年か人が訪れたことのないような奥まつた場所であつた。そもそも地下フロアは必要とされなくなつた知識の記された書物の溜まり場である。いわば本の墓場だ。奥まつた場所にある書物ほど、そこに記された知識の需要は低い。そのためか、地下フロアの存在を知らない者も多い。

それをいいことに少女は本棚の間の壁際に陣取り、そこをベースとして食べるようすに本を読みふけついていた。

食料や紅茶などを持ち込み、床に座り込み、周囲に本の塔をいくつも作るという自由ぶりである。自身は頬着なく直接床に座り込んでいるが、本は丁重に扱つていて。塔の一番下には清潔な布を敷き、飲食時は自身に結界を張るという徹底ぶりだった。

地下フロアで自由に過ごしているのはいいとして、青年がいるのは人にバレたくないため、地下フロアに探査魔法を掛け誰か来たすぐ分かるようにしている。

そもそも気付かれないように防音と防臭、目くらましの結界を張り、ついでに必要なが物理防御と魔法防御の結界を張っている。探査・索敵魔法に対する防御魔法も使う。どうせなら居心地よく過ごすために結界内の温度調節もする。これらの補助魔法は使用者よりも魔力量が多くないと破ることができないものだ。

面倒を避けるための手間は惜しまない。そもそも青年が一番の面倒なのだが、あまりのしつこさに少女は追い出すことをとうに諦めていた。

## 02・ナズナとヴァイス(2)

溜め息を吐き青年に一瞥くれて、少女は読みかけの本を鞄に仕舞つた。ビル群の「ごとく積み重ねられた本たちを、黙々と元の場所へと戻していく。

全てを戻し終えると、未だ倒れ伏している青年に声をかけた。

「ここまでそうじてるの。私はもうそろそろ帰るけど」

青年は瞬時に立ち上がり、一叩一叩と少女の元へ駆けていく。少女は今日何度も目かしれない溜め息をついた。

「私、あなたの将来が心配になるわ」

殴られ蹴られても、その加害者へと尻尾を振る勢いで嬉しそうに近づく青年に憐れみと少しの恐怖を覚えつつ、そう呟かずにはいられない。

「なんだ、俺の身を案じてくれるのか?」

「どちらかといふと頭の方を。あとそのドツツブリ」

「俺は断じてMじゃないぞ!どちらかといふとMだ!…」

それは偉そうに言つことじやないと少女は心底うんざりする。

先程の攻撃を少女は手加減抜きでやつていた。青年に通用するとは端から思つていなが、それでも少女の能力を考えたら多少は効いたはずなのだ。そもそも避けられるのに何故避けないのか。それを考えたら一つの結論にしか辿り着かなかつた。

「殴られても蹴られても嬉しそうだったじやない」

「お前だからだろう。それに自分で殴つておいてあたふたと心配する姿は可愛かつたぞ」

「…………」

やはりマゾじやないかと思いつつ、これからは心配してやるものかと少女は心に決める。話ながらまとめた荷物を抱え、青年に振り返つた。

「まあいい。私は帰るね。あんたもきちんと仕事しな。レイクにまた怒られるよ」

「…………わかっている」

青年は、少女の素つ気なさに肩を落とした。

知り合つてかなりの月日が経つていても拘らず、彼女の態度は出会つた頃と変わらない。甘さが全くないことに、日々の結果なしと切なくなり頃垂れた。

視線を感じ、青年は顔を擧げる。少女に射貫くよつた眼で見据えられていた。

何の感情も映さないのに強い意志を感じさせる瞳に、青年は吸い込まれるよつた錯覚に陥つた。

「…………ねえ、契約解除してくれない？」

「無理だ」

会つ度繰り返される問答<sup>ア</sup>

「じゃあ契約内容を教えて」

「嫌だ」

もはや決まりきつた遣り取り。

魔法で居心地よく温度調節しているはずの空間で、青年は凍てつくような寒さを感じ、肌がピリピリと痛んだ。互いに眼を逸らすことはせず、耳が痛い程静かな時が流れていく。緩まない空気に永遠を感じる。

「……はあ」

少女の脱力した溜息が響く。

途端空気が緩み、先程までと変わらなく流れ出す。戻ってきた居心地の良さに、青年はそつと安堵の息を漏らした。

ふと、今の時間に気が付く。地下なのではつきりとはわからないが、恐らく日が落ちてからかなり経っているだらう。王宮魔導士の勤務時間はとつて元に終了してくるはずだ。

「今日は仕事場に寄つてくのか?」

「そのつもり。そのためにこんな時間までここにいたんだから。純

粹に本を読みたいのもあつたけど

「気を付けるよ。誰か残つているかもしれんし、同僚は一応城仕え

レベルだろ。気付かれないようにな

「私を誰だと思つてんの。そもそも別に見つかつたって問題はない

んだけど、面倒くさいだけで」

見つかつたときのことを考えたのか、少女は苦虫を噛み潰したような顔をする。

彼女のある意味重度の面倒くさがりを呆れつつも微笑ましく思い、青年は苦笑した。

「今日は戻るか。またすぐ来るが

「来なくて結構です。それより仕事しなさい」

「はいはい。ではな、ナズナ」

「じゃーね、ヴァイス」

寂しさを隠しもせずに微笑みながら別れを言ひヴァイスに、ナズナと呼ばれた少女は困った子を見るように微笑んで別れを告げた。次の瞬間にはヴァイスの姿は消え去つていた。空間転移魔法で魔界に戻つたのだ。

ナズナは溜め息を吐き、虚空を見上げる。窓のない地下フロアの薄暗闇のなか、力なくぼつりと呟いた。

「あの態度に懐柔されそつ。許しちゃいけないのにな…………」

切なさを含んだその声は、静かな部屋に染み入るよう溶けていった。

## 02・ナズナとヴァイス(2)（後書き）

一話の文章量をどうじょうつか悩み中。  
次回から増えるかも。

### 03・ナズナのワークスタイル

ヴァイスと別れた後、ナズナは仕事場へと向かった。

窓から差し込む月明かりが石造りの廊下を照らしている。一見寒々しい景色に、春の穏やかな風と溢れんばかりの花の香りが、ほんの少しの温もりを与えていた。

ナズナはそんな景色を味わうように、音を立てずのんびりと誰もいない廊下を歩いていく。この時間帯はすでに人気がなく、運悪く出会ったとしても見回りの巡回兵くらいだろう。

「ここは常春の国。魔導大国ウィーストリア。

一年を通して春の穏やかな気候。咲き誇る様々な花たち。

魔法が栄え、魔法で生計を立てる魔導士たちで成る大陸——の魔法の国。

ナズナはこの国で王宮仕えの魔導士になった。

無事誰にも会わずに仕事場へと辿り着くと、ナズナは自分に宛てがわれたデスクに向かった。

窓際にあるナズナのデスクは、月明かりに照らされていた。まるでスポットライトが当たっているかのように、周りから切り離されて見えた。物品は何一つ置かれておらず、引き出しにも何も入っていない。すぐにでも他の誰かが使うことが出来るほどだ。

ナズナがこの仕事場に規定された勤務時間内に訪れたことは、この仕事場のルールや自分のデスクの場所を教えてもらつた初日の一度きりしかない。

普段は今のような誰もいない時間帯を狙い報告書を提出した後、自分のデスクの上に置いてある次の指示書を受け取り、替わりに了承の印を記した承諾書を置き、仕事に行っているのだ。

これも奇人変人が多いとされる魔導士だからこそ許される行為だろ？。もちろんキャリア組もいて、きちんと勤務時間を職場で過ごし、覚えめでたいよう上司の機嫌とつてているらしい。同期の者の中にはもう昇進した者もいるらしく、大分落差が激しいようだ。

ナズナは出来得る限り目立ちたくないと考えている。そのため極端かとも思う方法ではあるが、姿を見せることなく仕事をこなしていた。よつてナズナは同僚に知り合いはいなく、同様にナズナもほとんど知られていません。実は幽霊なんじやないかと囁かれているのだが、幸か不幸かナズナの耳には入っていなかつた。

うつすらと埃を被つた自分のデスクの上を見ると、月明かりに照らされ青白く光る指示書が一枚、真ん中にこれを見よと言わんばかりに置いてあつた。他に何もないせいか、妙に空々しく見えた。

ヒヨイツと摘まみ上げ内容を確認する。

次の任務は治水のようだ。ちなみにナズナは水魔法専門の派遣員である。

新人・下つ端・エリート街道から外れた窓際らしく、いつも恐らく平均よりも少し長い出張期間を取つている。本来そのような期間は必要ないが、目立たないためと、調べ物に少しでも時間を回すためだ。

今回の任務先は今いる首都フィーニアの隣のヒルビア市を抜けて少し行つた所にある村なので、馬車での行き帰りに2日、仕事に3

日ほど見積もることにした。優秀な宫廷魔導士ならば仕事に一日しか知らないだろ？

デスクから埃を風魔法でちりと払い、適当な紙とペンを亞空間から取り出す。魔力を込めて任務了承の旨と完遂予定日を記し、最後にサインをした。

魔力は指紋と同じように人によつて質が異なるので、魔法が当たり前とされるこの世界では個人の識別方法として使用されることが多い、この国もまたそうであつた。

先日まとめた報告書を鞄から取り出し、一度読み直す。これは初めて報告書を提出したとき、面倒だからと簡易的かつ最小限に書いて出したら、再提出を喰らつたためだ。一度手間にさらなる面倒臭さを覚え、それ以降無駄にしつかりした報告書を提出していた。この場所に来るの避けたいというのもある。

間違いがないことを確認すると、先程まで指示書のあつたデスクのど真ん中に、これを見よ！といわんばかりに報告書を置いた。隣に領収書と書いたばかりの次の任務の承諾書もしつかり並べておく。

「よしつ」と小さく呟き、背伸びをした。一二三でやることは終わつたので、後は帰るだけだ。

再び石造りの廊下に出ると、仕事場に来た時と同じように、のんびりと城門へと向かうことにした。

「ここは常春の国。魔導大国ウィニストリア。

一年を通して春の穏やかな気候。咲き誇る様々な花たち。

魔法が栄え、魔法で生計を立てる魔導士たちで成る大陸一の魔法

の国。

「の世界に来てから半年とちょっと。宫廷魔導士になつてからあと少しで3ヶ月。

ここへ来た時から変わらない気温は、四季に慣れたナズナの時間感覚を狂わせていた。変化のない穏やかな空氣に、これまでを一瞬のように感じたり、また永遠と囚われていたような気がしたり。嗅いだことのない溢れんばかりの花の香りに包まれ続け、思考がゆるゆると鈍つていく。

現実感がない。  
世界が、遠い。

この世界に来てから何度も夜明けを迎える、痛い思いだつて数え切れない程体験しているのに、ふと気が付けばいつだつて夢見心地だ。魔法という、ナズナの常識から外れた非現実的な存在も、それに拍車を掛ける。

現実だと解つているのに。  
夢だと思つてしまつ、矛盾。

いつかその矛盾で傷付く時が来るだろつ。わかつて、いるのに。

ナズナは夢から抜け出すことが出来ない。

## 04・門兵リックの“今日のおすすめ”

日本で1Kのアパートを借りてこじんまりと生活していたナズナの感覚からすれば、この中世ヨーロッパ風の世界の城といつもの無駄尽くしとしか言い様がなかつた。

全体的にゆつたりと造られていて、実際に必要な空間を切り詰めてみれば三分の一、いや四分の一で事足りるだらう。端から端の部署まで歩くと、入り組んでいる通路を考慮すれば40分以上掛かりそうだ。そもそもこの世界には自転車の代替えさえ存在していないので、足腰勝負の氣がある。移動の度に、風魔法使い設定にしどけばよかつたとナズナはうんざりとしていた。

間近に迫る城門を前に唯一、この無駄に立派な城壁は実用的だから無駄じやないのかもな、どどこか矛盾したことを考える。このウイーストリアは魔導大国だが、他国はこの国のように強力な魔導士が揃つていならしい。攻めるとしたら何らかの魔法対策をし、武術がメインの戦法をとるのだろう。

しかし今は平和なものだ。周囲には友好国ばかりで、戦の気配もない。それを考えればやはり今は無駄だな、とナズナは先程までの城門の評価をバッサリと脳内で切り捨てた。

そうこう考えていのうちに官吏用の城門へと辿り着いた。

門ではセキュリティの一環として、個人の顔と名前、それから魔力の質の照合を行つていて。

「所属と名前を述べ、水晶に指を当てよ

「魔法省 水魔法部 治安保持課 所属 ナズナ=ニイザキ。出門です」

ナズナはそう言つて、城門の通路側に面した受付のカウンターに吊るしてある、ベルがぶら下がった水晶に指先を押し当てた。

それは個人の魔力の質を記録したもので、名乗りと魔力が違うとベルが鳴り、城内の各所に設置されているベルが一斉に共鳴する仕組みをとっている。ちなみに門によってベルの音質が異なり、それによりどの門に不審者が現れたのか示すのだ。

本気で城に侵入したいならば誰でも知つてゐるこの仕組みを避けるだらうが、実際侵入者への良い牽制なつてゐるだらう。

「異常なし。出門を許可する」

「お疲れさまです」

カウンター内で個人照合を行つていた青年に挨拶をし、街へと向かいはじめたとき、不意に明るい声が飛んできた。

「よひ、ナズナ！今帰りか？」

「おおう、お疲れさまリック。見ての通りだよ」

街寄りの門前で警備をしていた赤い髪の青年が声を掛けてきた。ナズナにとつてリックは、見た目キャラキャラしているが役に立つ格好良いお兄ちゃんであり、ある意味氣を使う職場と図書館籠りの疲れを癒す心のオアシスだった。

「今日はリックが担当だつたんだね」

「久しぶりだな！お前滅多に来ないもんな、王城…」

「あははは」

本当は結構入り浸つてますとも言えず、明るく笑つて誤魔化す。話が続かないよう、仕事の愚痴を振つてみる。なかなか話は広がり、

途中から本気で愚痴を零し合つた。

門兵たちとナズナはなかなか仲が良かつた。入出の記録が全くないと不信だらうと彼らと関わることは自分に許していた。自身同様権力から遠い下つ端のせいか、同族意識からの妙な安心感のせいか、彼らとは気を抜いて話すようになつていた。

だがしかし彼らは仕事中な訳で、話し込んでしまつて良いのどうか思わないわけでもない。けれど、当の本人たちは気にしてないようだつた。大丈夫かウイニストリア…と密かに思つているが、ナズナがそれを声に出して言つことはない。

「あ、リック。今日は？」

「おう…よくぞ聞いてくれたな！今日の“おすすめ”はとつておきだぞ！！」

いつもズバリと“今日のおすすめ”を教えるリックにしては珍しく、ワントクッシュョン置いた返答だ。そういうえば今日はいつにも増して“！”が多い喋りをしていることにナズナは気付いた。

リックは門番兵にしておくには勿体無いくらい耳が良い。

そんな彼は城門を守りながらあちこちに聞き耳を立て、得た情報から見出したお得な街中情報を“今日のおすすめ”として気に入つた人に教えていた。どの店の何が安いとか、どの食堂が美味しいとか、面白い見せ物が来たときとか。メジャーからマイナーまで何でも御戯れだ。

その耳の良さと情報処理能力を役立てればもつと出世できるだろうが、リックはそれを好まない。ただただ自分なりに面白可笑しく過ごすことには費やしている。そんなところをナズナは好ましく思つていた。

しかしへやうやう今日はテンションが高い。何事かと密かに身構えて続きを促す。

「何？」

「おーーーもーとワクワクしてみせりよーー俺が馬鹿みたいじゃんか！まあ今日の情報は知らんヤツはいないから情報としての価値は低いが…珍しいんだぞ」

とたんリックはガツクリと頑垂れた。日本人であるナズナには馴染みのないオーバーリアクションを前に、今日はどうやら頭の螺子が緩んでいるらしいと、ナズナは失礼なことを思った。

反応が簡潔すぎたのが悪かったのか、はたまた熱意に乗れなかつたのが悪かったのか、リックは拗ねたように横をそっぽ向いた。いい歳して拗ねてんじやねえよ！という心の声を表に表さないよう注意しつつ、ナズナはリックの機嫌を直すべく上手い言葉を探す。

「あー…」「めん？」

探ししたが適当な言葉を見付けることが出来きなかつたので、とりあえず謝つておくことにした。

「いや、お前がそういうヤツだつてことはわかつてたんだがな……」

「己のいつにないテンションの高さに貶付いたのだろう。リックはハツと頑垂れていた顔を擧げ、ナズナから目を逸らしてどこかバツが悪そうに呟いた。

「で？」

「おう、今日はフイーリフィッシュが捕れたらしいぞ。しかも大量にな

濁った空氣に、軌道修正せねばとナズナが明るい声と表情で訊くと、リックはどこか照れたように笑った。

すぐにいつもの調子に戻り、“今日のおすすめ”を教えてくれたのだった。

## 05・聖なる魚“フイーリフィッシュ”

「フイーリフィッシュって？」

「おい、そこかよ！－！フイーリフィッシュまで知らんのか、お前つてヤツは・・・」

ナズナのあまりの無知ぶりに思わず笑つ込んだリックだが、そんな状態になつてしまつ環境にいたのかと、憐れみを覚えた。知らず言葉は尻窄しつばさまりになる。

そんなリックに軽く憤りながら、内心ナズナは開き直つていた。

非常に不本意ではあるが、この21年で積み重ね刷り込まれていた馴染み切つた常識は、この世界では通用しないことが多かつた。今では生活に困らない程度にこの世界の“常識”というものを理解している。しかしそれは世界や国の概要、貨幣や生活必需品の相場、日常で使用する道具の使い方など、本当に生活を営む必要最低限の知識であった。よつてそこから少しでも外れた“常識”は未だナズナの中に揃つておらず、往々にしてそれはナズナにとつて“非常識”であることが多かつた。

そんなナズナは、みづか自ら情報を与えてくれるリックの前では無知を隠さず、わからないことは“聞くは一時の恥”と自分に言い聞かせ情報を集めていた。躍起になつて情報を集め回るのは普通の人から見ればおかしな話なので、自重し流れに任せてしまつた。

この世界の人間からすれば、ともすれば異端と見られてもおかしくない“非常識”なナズナに気付いているのかいないのか。リックはナズナを気にかけ、戯おどけたり茶化したりとあくまで明るく、そしてさり気なく、この世界の“常識”を与えていた。

「で、フィーリフィッシュって？」

ナズナにとつてみればこの世界にいること自体理不尽である。無知であるのは不可抗力だと、無意識に苛立つた声を上げてしまう。

「ああ、悪い。フィーリフィッシュはな、神聖な魚つていわれてんだ。所謂聖魚つてやつだな」

「生魚…成魚…制御…？つてああ聖魚か？ええつー魚があ…」

聖女でも聖獣でもなしに、聖なるものが魚であることにナズナは驚いた。地球上聖魚なるモノはたとえ概念だけでもあつたかと記憶を漁るが、思い当たらない。少なくとも一般的ではないだろう。

「神聖つて…・精霊の御使いつてこと？」

魔法が当たり前に存在するこの世界で、精霊は日本の八百万の神と似た存在であるらしかった。決定的に違うのは、精霊が確実に存在し稀に目撃されている点と、魔法という恩恵をこの世界の者に与えている点である。

精霊は万物に宿り、何処にでも漂い存在しているらしい。特に力のあるものは可視化でき、そのなかでも最も力あるものは精霊王と呼ばれている。人間にとって精霊王が最高神にあたり、崇め奉る対象となっていた。

ちなみにこれらはナズナの“異世界ピッククリランキング”の上位に入賞している。

そんな精霊の眷属は特に神聖視されており、人の前に現れたものを“精霊の御使い”と呼んでいた。

リックはナズナの言葉に頷くと、嬉しそう声を弾ませて続きを話す。

「んでな、このフィーリフィッシュは普段滅多に捕れないんだ。てか目撃情報すら稀だ。なのにな、なんでか大量に捕れちゃったんだよ…」

「ああ、つまり天変地異の前触れか！？ってこと」

日本でも普段は捕れない魚が大量に捕れたらそう思つくらいである。精靈と密接らしいこの世界で聖魚が大量に掛かつたなら、パニックになつてもおかしくないのかも知れない。

それにしては嬉しそうだと訝しみながらも、ナズナは当たりを付けてみたのだが。

「はあ！？なんでそうなるんだよ。神様が施しを下さつたって、街中お祭り騒ぎだぞ」

「…えつ」

思いがけない方向からバッサリと否定され、ナズナは驚きに小さく声を零す。さすが異世界目線が違うとどこか呆れつつ、新たな知識を脳に刻み込む。

「神の御使いなんだしょ？なんで施しになるの」

「フィーリフィッシュはな、聖魚の名の通り聖なる力を内に秘めて、それを食うと精靈の加護が得られるつて噂だ。普段はその希少性から貴族サマの口にしか入らねーんだが、今回は庶民に行き渡るくらい捕れた。漁師も僕倖つてんで、売らんで配つてゐらしい」

「それはまた…人がいいね。それこそ稼ぎ時だらうに」

これまた予想外の方向性に言葉に詰まり、自身の考えを言葉にしてしまわないようにと少しズレた感想を述べる。

ナズナの感覚からすれば、神聖なものに對して供物を捧げることはあつても、反対に神聖なものを食べてしまつなんてありえなかつた。今回彼らのいう“施し”は漁業によつて得られたが、目線を変えれば捕獲ともとれるのだ。

どうにも罰当たりな気がして恐ろしく、後に祟られてしまうのではないかと心配にもなる。

しかしリックは嬉しそうであるし、街からはお祭り騒ぎの喧噪が確かに聞こえてくる。この世界ではこれは祝福の類なのだと、賑やかな空氣に認識させられる。

大抵の場合、意識に根付いた祝い事を否定することも、それをした者自体も周りから忌諱されるものだ。特にこの世界では神聖視されている精靈絡みのものを否定してしまつた場合、狂信者に何をされるかわかったものではない。

リックとナズナは会話した回数は決して多くないが、ナズナの王宮勤め以来3ヶ月の付き合いにもなり、互いの人となりを理解しつつある。

リックは軽そうな外見にそぐわず、多少彼らの倫理觀に合わないことを口にする者がいたとしても、決して一方的に指弾したりしない。むしろ一般的な感覚を教え注意を促しながらも、個人を否定せず受け止めてくれる懐深い人間だとナズナは知つてゐる。必ずしも外見と中味が一致しないという良い例である。

しかしナズナは異邦人だ。

たとえ姿形が似通つていても、ナズナの身も心もこの世界から生み出されたものではない。欠片も混ざつていないので、脈々と受け継がれる血も、この世界に根付いた性質も、何一つとして持つていない。

何処にも属さない存在。本質的に、独りぼっちだ。

仮にナズナがこの世界の住人だつたら、大衆からズレている思想であつてももつと曝け出していただろう。リックにだつてもつと気安く、色々な事を話していただろう。

同じ世界で生まれたもの同士、きっとわかり合えるはずだと信じたはずだ。納得はしてもらえないでも、理解してくれるのではと期待したはずだ。

そんな青臭い理想は、ナズナにとつては見ることの出来ない甘い夢だった。

話もそこそこに、ナズナは帰宅の途に就いた。  
道すがら押し付けるように与えられる“施し”を丁重に断り、この世界に来て一番の明るく賑やかな喧噪を背にして。

掛けられる声に愛想笑いを返しつつ、重くなる足を叱咤して家に着いたとき、どつと疲労を感じた。

途中で買った食料品の紙袋を、思わず漏れた乾いた笑いを誤摩化すようにテーブルに置いた。

翌朝はよく晴れ渡り、沁み入るような青空だった。まばゆらに転がる深夜まで及んだお祭り騒ぎの名残が、乾いた冷たい空気で満ち朝の陽に白く照らされた街をどこか空々しくさせた。

ナズナはそんなまだ人気の少ない街中を、革のリュックサックを背負いのんびりと歩いていた。

辿り着いた乗合馬車の待機所は、第一便の出発を待つている人たちで多少の賑わいをみせていた。軽食を扱った小さな屋台が幾つか出ており、そこで朝食代わりに棒に巻き付けて焼かれたパンのようなものを買うことにする。手近な岩の上に座りもぐもぐと咀嚼していると、後ろから声を掛けられた。

「おはよっさん。今日はどこまで行くんだい？」

「おはよっ」ざこます、イースさん。今回はコーデリック村まで仕事です。」

振り返り挨拶を返す。そこにいたのはモカ色の短い柔らかな髪とこの国で最も一般的な焦茶の眼を持つた穏やかな青年だった。簡易な服装に剣を帯びゆつたりと佇んでいる。彼は乗合馬車の御者であり、ナズナが世話になつた人の一人でもあつた。

ナズナが横にすれ場所を空けると、イースは隣に腰を下ろした。

「こんな朝早くからかい？大変だね」

「いえ、途中でヒルビアに寄つてこいつかと」

もぐもぐとパンを食べながらナズナは答える。喉が渴いてきたなと思つて、イースが水筒を差し出してきた。ナズナのリュックの中

にもあつたが、イースの心遣いを有難く受け取ることにする。

「あー……黒狼衆のところに行くのかな。そういう『えいばダンバートさん

が騒いでたよ、ナズナが全然来ない』って」

「ほんとですか！？……行くのが怖くなりました」

「あははっ、あの人過保護みたいだからね。お説教でもされるのかい？」

「お説教ならまだ良いですよ！ほら、あの人口下手じゃないですか。きつと代わりに扱かれます……」

近く訪れるだらう未来を想像したのか、ナズナは自身を緩く抱き締め遠い目をしている。イースはそんなナズナの頭をポンポンと軽く撫でると、岩から軽快に腰を上げた。

「さあ、そろそろ出発だ。ヒルビアに行くのが楽しみだね？」

「？ーっ」

食べ終えたパンが巻き付いていた棒を握り締め、唸り声を上げて座り込んだ岩から動こうとしないナズナの手からヒョイッと棒を抜き取ると、イースは軽く笑った。

「わかってるんだろ？」「？」

「…………まあ」

長く息を吐き出し、ナズナは小さく答えた。

ダンバートは不器用な男であるとナズナはわかっている。

彼は一度身の裡に入れると溢れんばかりの愛情を注ぐのだ。しかし照れているのか、傭兵集団・黒狼衆の団長という立場からか、素

直にそれを表さない。いつだって飄々としている上に、口に出す言葉は捻くれひん曲がっているのだ。

出会つた当初は額面通りに受け取り、ナズナは傷付いてばかりだつたが、何重にも覆われた裏側が見えればいつそ微笑ましく思えた。だからといって訓練に手を抜く男ではないので、なかなかの実害があるのも事実である。

害があるにも拘らず、そんな不器用ない歳したオッサンを可愛く思えてしまう自分に不安を覚えたナズナは、ダンバートを中心でツンデレ団長と呼び心の安寧を計らつていた。

「さあ、参りましようお嬢さん。急がねば日暮れまでにユーテリックまで辿り着けませんよ?」

戯けたように言った。

「ええ、そうね。願わくば彼らが早めに解放してくれん事を

ナズナはイースの手を取ると、調子を合わせてこつこつと微笑む。

「ええ、そうね。願わくば彼らが早めに解放してくれん事を

そう言いつと、ナズナはヒョイと岩の上から飛び降りた。

互いに手を取り合つたまま、口調はそのままに仕草まで貴族の身振りに変えナズナは訊ねる。態と大げさな身振りをしているにも関わらず、本当の貴族のような気品があった。

「今日はあなたがヒルビアまで共に向かつて下さるのかですか?」

「はい、そうです。本当はどこまでも共に参りたいのですが、本日の私にそれは許されおりません。なればこそ、道中の楽しい一時を約束致しましょう」

イースは恭しくそつまつとナズナの手の甲に軽く口付けを落とし、手を放した。

「まあ、本当に！？それは楽しみです！約束を違えたならば針を千本ほど飲んで頂きますわよ？」

「……………つくは」

手を胸の前で組み少し高い声ではしゃいだような声を出し、左手を腰に当て右手を顔の横で念を押すようななかたちで添え、人差し指を上半身とともにズイと突き出すといつ演出過多なナズナの仕草に、イースは思わず吹き出した。

それを引き金にナズナも笑い出す。

「なんだい、針を千本つて。恐ろしい事を言つ」

口元に拳を当て、笑いを抑えながら途切れ途切れに言つイースは、早くも涙目である。

「私の国の定型文です。それより何ですかあの口説き文句一体がむず痒くなりましたよ」

顔の下半分を手のひらで覆い震えた声でナズナは言つが、区切り毎に笑い声が漏れてしまつ。

「君こゝそあの過剰な演技！今時役者だつてしないよ」

ナズナの仕草を思い浮かべたのか、抑え切れずにくつくつと笑いが零れる。

「それを言つならイースさんこそ。手に口付けなんかして、あなたは騎士ですか！」

その言葉を皮切りに二人して吹き出し、腹を抱えて人目も憚ら<sup>はばか</sup>らず笑い出す。

ヒルビアまでの道中ナズナはイースと共に御者台に座り、約束通り楽しい時間を過ごした。

朝の瑞々しい空気とイースとの面白い会話はナズナの頭をスッキリとさせ、深みを増していく青い空はナズナに元気とやる気を<sup>はら</sup>えてくれた。

## 07・ファンシーなショップのファンシーな店主

ヒルビアに着いたのはちょうど朝飯の時間帯だったためか、街は食堂や屋台が並ぶ市へと向かう人々で賑わっていた。

ナズナは賑やかな雑踏を背に、陽がつくる柔らかい陰の中を路地裏を縫うように進んでいた。人も店も見なくなつてからもしばらく歩き続けると、見落としそうなほど小さな看板をさげた小さな店が見えてきた。

「ルティア姉さんの店発見。…相変わらず胡散臭いな」

そう呟くと、ナズナは安堵まじりの溜息を吐いた。

大通りから非常に奥まった場所に構えるその店は、決められた道筋を通りぬけなければ辿り着けない魔法がかけられている。路地裏は迷路のように入り組んでおり、通り慣れたナズナであつても毎回多少の不安を覚えながら目指していた。

実際にナズナが忌避しているのは道筋を間違うこと自体ではなく、その場合にもう一度大通りから歩き出さねばならない面倒だが。

その店の小さなショーウィンドーは、一見ファンシーで可愛らしい。しかし色とりどりでポップな装飾の中に置かれたファンシーグッズは、よくよく見れば背筋が寒くなる物ばかりだった。蜥蜴や蝙蝠、またナズナの世界では存在しないようなグロテクスな生物の乾物が、色とりどりのリボンを結ばれて容器に挿されている。その容器は何かの生物の頭蓋骨であり、ピンクの水玉模様や水色のストライプ模様に塗られていた。

小さな看板を仰げば、変哲のない焦茶の木の板に、まるで日本の

女子高生を思わせるような「占い屋」とした文字と色使いで“占い屋”と何の捻りも無く書かれている。

人目を避けるように奥まった場所にあるにも関わらず、人の目を強引にも奪つファンシーなディスプレーと、そのおどりおどりしい内容物とのギャップは、言い表せないような胡散臭さを生み出していた。この国の成人男性が背を屈めないと通れない一般より小さめのドアも、いもしない小人を歓迎しているかのようで、不安を煽られる。

無事到着できたことに安心しつつも、妖しいオーラを放つ“占い屋”と、その中で今かと待ち構えているだろう店主を思うと、ナズナは入店する前から気疲れを感じてしまっていた。

大きく息を吸い込み意を決すると、ナズナには丁度いい大きさのドアを緩く押し開けた。ナズナはこの店に入る際には、探査系統の魔法の使用を一切禁止されている。そのため、魔法を使わずに自身で出来るだけ気配を探り、慎重に歩みを進めた。

「こんにちは、ナズナですけど…」

ポップでファンシーな店内の装飾に対するように薄暗い、得体の知れない不気味さを発する店内に、ナズナの声が滲むように溶ける。返事はない。

「…どこですか、ルディアね…えつ！…！」

突然視界が暗くなつた。首も締められ、ナズナは酸素を求めて喘ぐ。

一瞬身構えたが馴染んだ匂いが鼻を突き、緊張を緩めた。だが顔と首に巻き付いた腕が緩まつたわけではない。

「うふふ、オ・ヒ・サ・シ・ブ・リ？ ナーアーちゃん！」

ナズナの首を絞めながら甘く囁く声の主は、挨拶をしながらもゆるゆると腕の締め付けを強める。

「ふ、でいあね…え、ギブア…ツプ、です

酸素不足を訴えかけるため、巻き付く腕をパシパシと叩く。それを受けてルディアと呼ばれた襲撃者は、名残惜しそうに腕を解いた。首を絞める代わりといわんばかりに、背後から抱き締められる。

「んもう、情けないわねえ

「…っすみません」

細くなつた器官を咳き込んで回復させ、ナズナは力の抜けた体をルディアに預けながらも謝つた。しかし、この状況に不満がないわけではない。今後のためにも今のうちに改めておかなくてはと、ルディアの腕から脱出し向き直る。その際に何かの頭蓋骨を蹴り転がしてしまつたが、あまりに見事な転がりぶりが哀れさを誘い、心の中でそれに謝罪した。

「だけどこのような手荒な歓迎をしてくれなくとも構いません。むしろ遠慮します」

「そんなあー！ だつてだつてえ、ナーちゃん最近めつきり顔見せに来てくれないじゃない？ 寂しくて寂しくつて、堪らないんだもの！ 思いが有り余つちやつてるのよ…受け取つて？」

「あー、顔を見せなかつたのは謝ります。しかし素直に思いを受け取れません。まだ死ねないので。それとナーちゃんは止めて下さい」

年齢と外見にそぐわず何とも乙女趣味な格好をした女性の台詞に、ナズナは溜息を飲み込み、顔を覆つて呻いた。

“占い屋”の店主であり、ナズナに少々過激な挨拶をしたルディアは、豊満な肉体と妖艶な雰囲気を持ち、思わず従いたくなるような色香を漂わせる美女であった。緩くふんわりとしたゴージャスな薄紫色の髪と、エメラルドの如く輝く宝石のような緑の眼は、彼女の内も外も引き立てていた。

そのような豪華な外見と豪快な中身を持つルディアは、イメージとは真逆のナズナの世界でいうロリータファッションを好んでいる。一見チグハグながらも自信に満ちあふれた着こなしぶりが、一種の倒錯的なものを見るものに感じさせる始末である。

「そんなこといわないでよう、いけずうー」とかなんとか言いつつ、ナズナに絡みだしたルディアを好きにさせながらも、ナズナはここに来た目的を遂げることにした。

「それよりルディア姉さん、何か新しい情報はありますか？」

ルディアは“占い屋”的看板を下げているが、本職はほとんど情報屋だ。

ナズナの言葉に仕事モードになつたのか、ルディアはナズナからパツと離れると水晶玉の置かれたテーブルヘとルンルンと向かつた。仰々しい動作で椅子に座ると、ゆつくりと脚を組み、頬杖をつく。ナズナを見上げてニーッコリと微笑むと、表情と真逆のことを告げた。

「ざ～んね～んで～したあ！情報はあ、全然入つてこないのよう。ごめんなさい？」

「…………はあ」

いつも通りの甘つたらしい喋りと小首を傾げるという仕草が相まつた小憎らしい態度に、ナズナは怒りと悲しみがこみ上げる気配を感じた。それをなんとか飲み込むと、代わりに深々と溜息を吐き出す。

ここで感情のままルディアハつ当たるのは、あまりにも情けない。そもそも求めている情報は、期待するほうが間違いなのだ。諦め半分で、長期戦を覚悟するしかないというのに。だいたい手紙で定期的に遣り取りし、情報が入つたら即刻知らせるよう頼んでいるのだ。店まで出向くのは無意味である。わかっているにも関わらず、しかしあせずにいられなかつたのだ。

思つていた以上に焦つてゐる自分に、乾いた笑いが込み上げる。しかしながらズナはそれを表に出すことなかつた。

ルディアに情報の有無を確認したことでヒルビアでの用は済ませたので、ナズナは任務地であるゴーデリック村へと向かうことになった。

早朝に乗合馬車の待機所でイースにはああ言つたが、ナズナは黒狼衆に顔を出すことに乗り気ではない。彼らに会えるのは嬉しいが、それ以上に疲れを感じるため、できれば遠慮したいのだ。頭を切り替えたナズナは、早々に出発することにした。

「まあ、手紙でも情報無しつて書いてましたしね。ではそろそろ失礼します」

「ちよーっと待つたあー！ 用事済ませたらすぐ行っちゃうの？？

「、釣れなすぎるよう、ナーチャーん！」

「あ、すみません。お土産を今回忘れてしましたね。今度来る時はきちんと持つてきますから」

用は済ませたとばかりに去ろうとするナズナにルディアは涙声で訴えかける。

ナズナはねだるように見つめてくるルディアを、土産で誤摩化することにした。美味しい食べ物に目がないルディアは、案の定ナズナの策に引っ掛けたようで、途端目を輝かせる。

「え、やつたあ！あのねあのね、王都のねえ、今流行のおケーキ！食べたいのよう～！」

「あのデコレーションのカラフルな（アメリカのお菓子のように）つそグロイ色彩の）ケーキですか？わかりました。持つてきますね」「うんうん、楽しみにしてるねえ～って違ううちがあ～う～！」

「どうしましたか、ルディア姉さん」

ナズナは普段では見せない、爽やかな笑顔をルディアに送る。アメリカの菓子を思い出しうんざりしつつも懐かしく思っていたナズナは、誤摩化してくれなかつたルディアに内心で嘆息した。こうなつたら、笑顔で強引に押すことにしかない。

「ううん～、なんでもないのよう～？……はつ～うふふ、いけないわあ、ナズナちゃん？」

ルディアはナズナの笑顔に押し流されそうになつたが、何かに気付いたように自身を取り戻した。形勢逆転とばかりに意味ありげな笑顔を浮かべると、絡めとるような声でナズナの名を呼ぶ。

それに気圧されたナズナは思わず一歩引き、周囲の気配を探る。

「ああ、確保よう！下僕一号」「…」

高らかな声と共に、一いつの影がナズナに迫つた。

## 08・忙しない双子（1）

ルディアの掛け声より一瞬早く気配に気付いたナズナは、右手首のバンブルに左手を添え小さく咳いた。

### 「刀」

言い終えると同時に手の中に現れた日本刀もどきを両手で眼前に添える。視認よりも速く反射で動いた体に視覚が追いつくと、首より30cmほど手前にナズナの日本刀に止められた西洋剣があつた。

「炎よ！俺の剣に纏え！！」

力で押し切ろうと思つたのか襲撃者は剣に炎を纏わせ温度差でブーストし始めた。それに対する次の一手を判じようといつといふに、背後から魔力波動を感じた。

対峙していた剣をしゃがみ込みつつ受け流し、足払いをする。よろけた男を蹴り倒し、背後の人物に相対する姿勢で肩甲骨の間を膝で踏みつけた。間を置かず魔法を放たれた気配を感じ、ナズナは下にいる人物の左胸付近の余つた布を刀で縫い付けながら、魔力を込めて囁いた。

### 「水鏡」

ナズナまであと1m?と迫っていた水の固まりはナズナに触れる寸前で突如現れた半透明の壁に阻まれ、まるでピンポン球のように魔法を放つた者へと跳ね返る。ナズナへと攻撃を仕掛けた魔法士は舌打ちをすると、手を払い魔法を打ち消した。

動く者がいなくなつた部屋に静寂が落ちる。

しかしそれも長くは続かず、場違いな拍手で断ち切られることとなつた。

ナズナの俊敏な動きに感動したルディアは、パチパチと手を打ち鳴らしながら目をキラキラとさせてそう言つた。ナズナに駆け寄り抱き締める。

「ちょつ、危ないです」

「まだ剣で襲いかかってきた男を踏みつけていたナズナは、勢いのついたルディアを支えきれず彼を下敷きにルディア共々倒れ込んだ。「ぐえっ」とカエルの鳴き声を発し沈黙する男を案じてか、魔法士が近寄ってきた。

「ルティアさん、勘弁してやつて下さい。ルミナスは退いてくれと頼む余裕もないよつですよ。ナズナさんはやつせと弟の上から退きなさい」

「あ～っ！ごめんねえルーチayan、だいじょーぶかなあ～？」

魔法士はルディアに手を差し出しながら微笑んでそう言つた。ルミナスと呼ばれた下敷き男とルディアにサンドイッチの具の如く挟まれ辟易していたナズナは、かけられた言葉の理不尽さに思わずムツとする。

ルディアは魔法士の手を取ると、勢いをつけてヒョイッと立ち上

がつた。再び呻いたルミナスを無視し、ナズナも縫い付けていた刀を床から引き抜きそれに続く。バンブルに刀を仕舞うと、にっこり微笑んでイルネスに向き直った。

「久しぶり、イルネスさん」

「お久しぶりです、薄情者のナズナさん」

「何それ、下僕一号さん。あ、一一号？」

先程の歓迎に続きアグレッシブな挨拶を受けたナズナは、ルディアに下僕一号二号と呼ばれていた兄弟を思い出し嫌みを返した。微笑みながら婉曲に毒突き合う二人の足下からはがなり声が聞こえ続けており、声の主への同情を禁じえない。

「ふふふ、ルディアさんの下僕になった記憶はないのですがね。強いて言うなら一号でしょうか、そこで伸びてるの兄ですしね。ほら、いい加減起きなさい」

イルネスはナズナの言葉をさらりと受け流し、ナズナが立ち上がった直後から交替とばかりにグリグリと踏みつけていた弟を足で引つくり返した。屈辱的な加重が屈辱的な仕打ちで無くなつたルミナスは、勢い良く起き上がると兄に食つて掛かる。

「なにしやがるイルネス！人を足蹴にしやがって！！」

「こり、兄上と呼びなさい。いつも言つてているでしょう。それにあの程度、起き上がれない方が悪いのです」

「ふざけんな！双子に上も下もあるかよ！？ しかも魔法使つてまで踏みつけといて、よく言えたもんだな！」

「残念ながら上もあるのですよ。あれはあなたの苦手な魔法抵抗の実地訓練の一環です。全然駄目駄目な結果に終わり、残念ですが」

言い合いをしている一人は色彩以外そつくりだつた。170cm後半の身長にしなやかな手足を持ち、程よく筋肉の付いた体型をした一卵性双生児である。

兄のイルネス＝ヴェイトリッヂはパウダーブルーに輝くプラチナの髪と瑠璃色の瞳を持ち、知的さを思わせるような、人を食つたような顔をしている。対して弟のルミナス＝ヴェイトリッヂはパウダーピンクに輝くプラチナの髪と茜色の眼を持ち、人懐っこそうな幼さを見せる顔をしていた。元の造形は全く同じなので、中身の違いが人に与える印象を変える良い例である。

何よりもそつくりな柔らかな髪質が顔立ちと相まい、二人を双子だと周囲に判らせていた。また彼らは息の合つた前衛・後衛をこなす相棒であり、歳の割に優秀な魔導戦士として“ヴェイトリッヂ兄弟”と名を馳せてもらっている。

「それよりも任務失敗の危機です。ほら、待ち人が逃げてしまいますよ」

「えつ……てコラ、待てよ……！」

いつまでも続きそうな兄弟喧嘩とそれを楽しげに眺めるルディアをいいことに、ナズナはそつと逃げ出そうとしていた。しかしイルネスは目敏く見付け、すかさず弟を差し向ける。

ルミナスは走り出そうとしたナズナに素早く駆け寄り、引き止めようとした肩を？んだ。次の瞬間、

「うがつ……！」

電撃に見舞われ、再び床へと倒れ伏すことになつたのだった。

長めになりそうなので、短いのを連日投稿

## 09・忙しない双子(2)

ナズナの足下には、軽く焦げたルミナスが床に伏している。

おそらくルミナスが自分に触れたことで電撃の魔術が発動したのだろう、突然の、思いがけない展開に、ナズナは呆然とした。ルディアは「あらまあ～」と呑気な声を上げているが。

イルネスは呻き声を上げる弟を一瞥し、黒いオーラを背負つて底冷えする笑顔を纏うと、腕を組んでナズナに向き直った。ちなみに目は全く笑っていない。

「ナズナ、君はそんなに僕たちと会いたくないのかな？」

「どうして魔術が、と頭の中を疑問符だらけにしていたナズナは、絶対零度の声で敬称なしで呼ばれ、撃たれたようにハツとした。

「いや、電撃喰らわせるほど会いたくないわけじゃないけど」

「そう…じゃあそれなりには会いたくなかったってこと」

「待った、そうじやない。今回は仕事のついでにヒルビアというからルディア姉さんのところに寄つたのであって」

黒狼衆へは顔を出すと長くなるから別の機会を設けて訪ねるつもりだつた、と言い募ろうとするも、

「ふうん、あれだけ目をかけてあげたのに。ルディアさんへは顔を見せに来ても、僕たちは会いにくる価値もないってこと。本来なら時間の隙間を見つけるなり作るなりして奉仕すべきだと思うんだけど？」

「つ…、色々と、世話になつたことは、感謝してる。だけど、…

…

「だけど？」

「……」

イルネスの正論に遮られたナズナは、言葉に詰まりつつも弁解をしようとした。しかし、その先は、続けることが出来なかつた。

この世界に来てから、右も左もわからなかつたナズナの面倒を見てくれたのは、イルネスたちが所属する黒狼衆だ。ブラックウルブスナズナは言い表せないほど感謝しているし、当然その恩は何らかのかたちで返さなければとも思つてゐる。だからイルネスの言うことも、尤もだと感じる。

しかしナズナの心は、一刻も早く元の世界へ帰らなければと、いつだつて、どうしようもなく焦つてゐるのだ。不義理かもしけないが、ナズナの最優先事項は恩義ではなく、帰還である。それを変更するつもりは、全くといつていいほどない。

ナズナはこの自分本位な言い訳を、イルネスにすることは出来ない。イルネスはナズナが異世界人であることを知らないし、なにより言い訳はどんなに繕あつと、言い訳にしか成り得ないのだ。

ナズナは自身のあまりの身勝手さに、なるほど確かに薄情者だと内心で自嘲の笑みを零した。

「もういいです。これからはもっと頻繁に訪ねてくる」と。いいですね？」

「…はい」

俯いて黙りこくつたナズナをじつと見ていたイルネスは、小さく溜息を吐くと放つてゐた黒いオーラを收め、有無を言わせぬ声音でそう告げた。精神的に疲れてきて、イルネスに反論する気力が絞り出せないナズナは、肯定するしかなかつた。

「さて、だらしなく伸びてるやつのを回復させてくれませんか？」  
頭中心に

なかなか失礼な言葉だよなと思いながらも、ナズナは素直に従うこととした。頭中心という要望なので、ルミナスの額に手を置いてまじない言葉を唱える。

#### 「全体回復」

ルミナスの全身が一瞬白い光の粒子に包まれる。

ナズナが唱えたのは、精度や効力は低くなる大雑把なまじない言葉だが、大体の痺れと痛みを取り除き、体力と気力を回復する程度なら充分である。なによりルミナスの基礎体力は人並み以上なので、過剰な回復は逆に疲労になりかねない。

ナズナが回復魔法をかけたのを確認すると、イルネスはもう用済みとばかりにルミナスから離れることを命じた。特に反論もないのと、ナズナはまた素直に従つた。

直後勢い良く伸びをしたかと思つと、顔を「ゴシゴシ擦りながらルミナスが起き上がつた。

「うあー、よく寝た」

「おはよう。あの状態でそんなこと思えるのはルミナスくらいだよ  
「あつー…そうだよー、なんなんだよあの電撃ーー！」

ナズナに猪の如く詰め寄るルミナスを、イルネスが襟首？んで犬の如く引っ張りナズナから遠ざける。

「ちょっと待ちなさい、ルミナス。ルディアさん、ナズナさんを

「はい、了解よん。さあ、ナーサン、ちょっとこっちに

いらっしゃい？」

いつの間にかテーブルに戻り二二二と終始を見守っていたルディアだったが、イルネスの言葉にハッとする途端ウキウキした。手招きしつつも「くふふう～？」と怪しげな笑いを漏らすルディアに、ナズナは思わず眉を顰める。

「なんなんですか、ルディアさん」

「いいからいいから、ほら早くう～」

妙に押しの強いルディアと冷ややかな空気を送つてくるイルネスに背中を押され、ナズナはテーブルを挟んでルディアの前に立つた。ルミナスは訳が分からないと呟いた顔をしながらも、心配そうにナズナを見ている。

「それでは視まあ～す！ナーサン、動いちゃダメだよう～

そう宣言すると、ルディアはテーブルに置かれていた水晶をヒヨイッと持ち上げた。水晶越しにナズナを頭からつま先まで見ていく。途中「はい裏あ～」と指示を入れ、後ろを向いたナズナをつま先から視上げていった。

少ししてルディアは「あつ～やつぱりねえ？」と謎の台詞を言った。

09・忙しない双子(2)(後書き)

まだ続きます。

水晶越しにナズナを覗いていたルティアは「やつぱり」と宣つと、「マーマと並む口元に両手をあて、わざとらしく隠している。“やつぱり”の意味がわからず首を傾げるナズナを見る田が、若干生温かい。

ルティアの言葉以降イルネスから発せられ始めた謎の冷氣から身を守るため、ナズナは無意識に腕を摩つた。

「イーちゃん！あつたよっ魔術痕！ ふふつ？」  
「え、魔術痕ですか？どこに？」

ルティアの思いがけない言葉に、ナズナは慌てて背中側を見ようとする。

「う・な・じ・の・ト・口・口？」  
「……………へえ……」  
「……………ふうん……」

うなじか、それなら自分では見れないな、などとナズナは顎に手を当て呑気に思いつつ、先程ルミニナスが喰らつた電撃へと思考を巡らせていた。そこにふと、見事シンクロした深海より深く低い双子の咳きが耳に入った。さすが双子！と感動する暇も無く、絶対零度まで室温が下がる。

ナズナは困惑しながらも冷氣発生源な双子に声をかけようと思つた。しかし不可思議な凍つた空気を破るには勇気が、少し足りなかつた。この寒さのなか、いつも通りののほほんとした空気を纏うルティアを背後に感じ、心の中で賞賛を送る。

物音を発することが躊躇われるような静寂のなか、ナズナは双子

に声をかけようと自分を叱咤した。

が、荒く踏み締める足音に、それは破られた。

苛立ちを床へと叩き付けるように歩きながら、ルミナスがナズナへと手を伸ばす。

「おいナズナー・ちょっとみせつ、ぐう

「待ちなさい、ルミナス。また電撃を喰らいたいんですか

ナズナの肩に指先が触れるかといふところで、イルネスはぐいっとルミナスの襟首を？み、勢いよく引っ張つた。崩したバランスを整えながら2、3歩後退した弟を「そこで待つてなさい」と留め置くと、ナズナの背後にまわる。

「ナズナさん、髪を上げて頂けますか

後ろ髪をまとめて持ち上げたナズナは、しかしすぐにそれを後悔した。背中に浴びる極寒の吹雪は、体どころか肝まで冷やした。なぜか生命の危機をひしひしと感じているなか、イルネスの一言でさらに状況が悪化することになる。

「…うなじにキスマークが付いていますが、心当たりはありますか？」

直後前方からも吹雪を浴びることとなつた。ナズナの胃がキリキリと痛む。

双子の前後からのブリザード攻撃に耐えつつも、付いていながらいキスマークについて考えた。昨日からの出来事を振り返る。

「特に思い当たらない。本当にキスマーク？虫かされじゃないの？」

「そうですね。ある意味虫をされですね。害虫ですが」

ナズナは視界の隅で、イルネスがポーチから眼鏡を取り出すのを捉えた。

イルネスは魔術を解析する時にこの眼鏡の魔道具を使うので、おそらくこのキスマーカ（？）が魔術痕なのだろう。

「つーかナズナ！こんなことすんのあのヤローくらこじゅねえか！」

「あのやろー……」

「鴉野郎だよ！カ・ラ・ス！！ 昨日今日お前と会ったはずだぞ！ そんときのだろつこれ！」

少し離れた場所から距離を保ちながらも、ルミナスがナズナに食つて掛かる。

ルミナスが鴉野郎と呼ぶのは一人きりだ。漆黒の髪と闇夜に星影の瞳を持つ、ナズナにとつて途轍もなく面倒くさい男、ヴァイス。

確かにナズナは昨日、ヴァイスと王宮図書館で会つた。しかしキスマークなんかを付けられるような出来事が思いつかない。

ヴァイスが勝手に結んだ契約をなんとかしない限り、ナズナとヴァイスが甘い関係になることは有り得ないと、ナズナは言い切れる。そうでなければ、ナズナはヴァイスを許すことを出来そうもないのだ。

甘い時間を共有した記憶もないのに、キスマーカなんぞ付くだろうか。相手に気付かせることもなく皮膚を吸い上げたことになる。ある意味相当の手練だ。女にとつて信用できない最たる男だらう。うなじに付いているということは、後ろをとられたということになる。思い返せば、昨日の右ストレートは背後から抱き込まれそうになり見舞つたのだった。

「あ。」

原因に思い当たつたナズナは、無意識に声を零した。

「あ、じゃねーよー！！！ 鴉野郎なんかに『氣い』許すなー！！」

「待つた！氣を許してなんかいない！あの時は氣が抜けてたかもしれないけど」

「あいつの前で氣を抜くなつひとつてんのー！！」

「だつて氣が付くと『いる』んだ！長々と居るんだよー。ずっと氣を張つてろつていうのー？」

「そうだ！！」

「普通に無理」

「ナズナだしムリじやないだろ！」

「面倒い、疲れる、だから嫌。『氣を張り続ける』ことで得られるメリットとデメリットが見合わない」

色恋に似合わない損得の話が出てきて、ルミナスは言葉を失つた。イルネスは魔術解析をしながらナズナとルミナスの言い争いを聞いていたのか、面白そうにルミナスの先を引き継ぐ。

「メリット・デメリットとは？」

「ヴァイスに身体的セクハラをされないことがメリット。そのため心身にかかる疲労がデメリット。ヴァイスの好意の示し方は子どものそれとあまり変わらない。嫌がれば止めるし。ウンザリはするけど、ずっと氣を張り続ける方が疲れる。だからメリットよりデメリットに天秤は傾ぐ

「ふんつ、ホントはまんざらでもないからじやねえの？」

腕を組んでそっぽを向いたルミナスは、不貞腐れたように言った。

イライラが抑えきれないのか、靴先で一定のリズムを刻んでいた。

「… そんなことあるわけないでしょ？」

部屋に響いていたリズムが、ピタリと止まった。

時間が止まったのかと思わせるほど、空気が凍っている。

今回の原因はナズナの冷えきつた一言だった。

ナズナは基本的に、笑っているときはもちろん泣いていようと怒つていようと、どこか温かさがある。感情を削ぎ落とした声を聞くことなど、滅多にあることではない。

普段からいえば異常ともとれるナズナの雰囲気に押され、双子は声を発することができなかつた。

10・忙しない双子（3）（後書き）

もう少し続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9996q/>

---

窓際魔導士の溜息

2011年4月17日11時15分発行